

- 自然と人との共生をめざして -

公益財団法人 淡海環境保全財団

表紙写真：彦根から望む多景島

しがCO₂ネットゼロシンポジウムを開催しました -CO₂ネットゼロで変わる2050年滋賀のくらしと社会-

滋賀県は、2050年県域からの二酸化炭素排出量実質ゼロを目指し、「しがCO₂ネットゼロ」ムーブメントのキックオフを宣言し取組を開始しました。CO₂ネットゼロの達成には、県民・事業者・行政が一丸となって取り組むことが不可欠であり、多様な主体が今できることを考える契機とするため、令和2年(2020年)12月12日(土)、大津市のびわ湖ホールでシンポジウムを開催しました。

パネルディスカッションでの三日月大造 滋賀県知事コメント



近年、100年に1度と言われるような気象災害が毎年のように全国各地で起きています。また、地球規模の環境問題や、私たちの暮らしを映す鏡と言われる琵琶湖でも、暖冬などにより「琵琶湖の深呼吸」と言われる全層循環が2年連続して起きないなどの異変が生じています。「2050年カーボンニュートラル」を達成するためには、これまでの取組をさらに強化、深化しなければなりません。

滋賀県は、面積も人口も日本の1%にすぎませんが、私たち県民1人ひとりが1歩踏み出すことは、ムーブメントを通じて世の中を変える大きな1歩につながるはずです。

CO₂ネットゼロに向けた取組をともに進めていきましょう。

基調講演



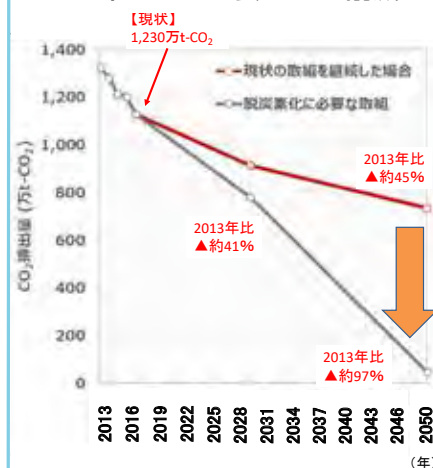
「脱炭素社会を目指す持続可能な地域づくり」

千葉商科大学准教授 田中 信一郎 氏

「現在は人口増加を前提とした社会システムの上にあり、無理がある。

- ①人口減少に立ち向かうため、クルマに過度な依存をしない都市構造への転換
- ②地域経済を活性化するため、地域主導型自然エネルギー事業の促進
- ③住民の健康寿命を伸ばすため、新築住宅の断熱化・既存住宅の断熱改修の促進が重要」と、地方創生の視点から脱炭素社会の実現に向けたまちづくりを提言いただきました。

2050年までに必要なCO₂削減量



未来を担う若者の取組事例



「持続可能な循環型社会を構築する創造的な人間の育成をめざして」

守山市立守山中学校 教諭 高井 あゆみ 氏

「スーパーエコスクール」校舎を活用した「光の授業」や「風の授業」を行い、生徒達が体験し、自ら課題を発見することを大切にする、環境学習を通じて学んだことを小学生に直接伝えることで在校生が、入学生が、そして教師が変わった、と発表されました。



「滋賀と日本の未来を変える10分間」

Fridays For Future Shiga 代表 高須 海地 氏

「僕たちがこんな社会を作ったんだ」と胸を張って言えるよう、生きていくだけで地球や環境に優しい、そんな社会のシステムを作りたい、行動し続けることで社会が1歩ずつ変わり、未来は変えられる、と動画や写真を交えて発表されました。

Index

- 1 表紙特集 しがCO₂ネットゼロシンポジウムを開催しました
- 2-3 2020年度滋賀県地球温暖化防止「COOL CHOICE」ポスター入賞作品決定！
表彰式&気象予報士 天達 武史さんトークショーを開催しました
- 4 その人に聞く 淡海料理Tovin 大西 正紀さん

- 5 日本ヨシ紀行 ～ヨシの風景を訪ねて～ 岡山県児島湖 滋賀県地球温暖化防止活動推進員リレートーク 白石 進さん
- 6-7 開催報告 ヨシシンポジウムを開催しました
- 8 おしらせ 高島コンポスト/「滋賀SDGs×ビジネス表彰」奨励賞ほか

特別講演



「2050年カーボンニュートラルに向けてよりよい未来に向かう地域づくり」

東京大学未来ビジョン研究センター 教授 高村 ゆかり 氏

「20年来追いかけてきた温暖化問題は、自分の孫や子の世代の話とと思っていたが、私たちの生活に直結するリスクになっている」「今の社会の延長線上には、残念ながら私たちの目指す感染症や災害に強い脱炭素の持続可能な社会はない」と警鐘を鳴らし、今後私たちが進むべき方向性について提起されました。

パネルディスカッション
「私たちが描く2050年しがCO₂ネットゼロ社会」



- | | |
|-------------------------------|----------|
| 滋賀県知事 | 三日月 大造 氏 |
| 千葉商科大学准教授 | 田中 信一郎 氏 |
| 滋賀銀行サステナブル戦略室長 | 嶋崎 良伸 氏 |
| パナソニック(株)アプライアンス社
環境運営企画課長 | 岡本 多郁士 氏 |
| 滋賀県地球温暖化防止活動推進員 | 山本 悦子 氏 |

高村 ゆかり氏の進行のもと、行政、有識者、金融、産業、県民それぞれの代表者が、それぞれの目線で滋賀の脱炭素社会への道筋と、今できることについて熱く議論されました。

滋賀県は、山、川、琵琶湖とつながっており、一体感を持って環境のことを考えられるため、CO₂ネットゼロの取組も充実できる。

社会課題の解決、すなわちSDGsをビジネスにしっかりと結び付けなければ、企業も淘汰される。

これまでの環境学習を土台にして、CO₂ネットゼロに向けて行動できる人材づくりのため、環境学習を進めることが必要。

ランダムに選ばれた県民が議論して、CO₂ネットゼロに向けたルール作りといったものができるか。

環境に良い製品、良い事業が選択されるマーケットの存在が重要。

2050年ネットゼロに向けては、「1人の100歩より100人の1歩」のさらに先へ、行政・企業・金融・県民が横一列となり、「100人ともが100歩」進まなければ達成できない。

2020年度滋賀県地球温暖化防止

「COOL CHOICE (クールチョイス)」ポスター入賞作品決定!

今年度で4年目となる「COOL CHOICE (クールチョイス)」ポスターの入賞作品の表彰式ならびにテレビでおなじみの気象予報士・天達 武史さんのトークショーを、去る2020年12月5日(土)、大津市のコラボしが21で開催しました。

天達 武史さんトークショー
～未来の暮らしを考えよう!～



気象予報士・天達 武史さんに、海が二酸化炭素を吸収することを見せる実験やクイズを交え、地球温暖化防止について楽しくわかりやすくお話いただきました。

ポスター表彰式

県内の小中高生から広く募集し、301の応募作品の中から、2020年度滋賀県地球温暖化防止「COOL CHOICE (クールチョイス)」ポスターの入賞12作品が決定しました。その入賞作品を使って「2021しがCOOL CHOICEカレンダー」を作成しました。



2021しがCOOL CHOICE カレンダー
希望される方は
財団へご連絡ください。

表彰と、記念撮影に続き、成安造形大学の石川准教授より、それぞれの作品の素晴らしかったところをコメントしていただきました。



- 滋賀県はギネス記録を持っている。それは伊吹山の積雪が1927年に1,182cmとなったこと。でも今は少雪に。
- 温暖化はだんだん暑くなるのではなく、極端な寒暖差を繰り返しながら、長いスパンで見ると気温が上昇。
- 「2100年 未来の天気予報」。日本の夏の最高気温が45℃に! 昼間の外出はできず、社会が夜行性になるかも。

さらに、ポスター審査委員長で地球環境戦略研究機関(IGES)の藤野上席研究員も登壇し、作品を描いてくれた入賞者のみなさんや、会場とのやり取りを盛り上げられました。



最優秀賞



滋賀県知事賞

林 瑛音さん

滋賀県立草津養護学校高等部2年
くらしを変えていくという思いが伝わります。キャラクターを登場させ親しみやすい表現や、隅々まで丁寧に描かれていることが、よりその思いを伝えています。

特別賞



京セラ賞

近藤 優有さん

彦根市立高宮小学校1年
みる人を元気な気持ちにさせ、日常の様々な工夫で太陽のエネルギー活用を考えることに結びつくと思います。



東京センチュリー賞

羽尻 優奈さん

滋賀県立水口東中学校2年
丁寧に優しいタッチで表現され、登場人物が地球を思う気持ち「小さな一歩が地球を救う」が伝わります。



滋賀県地球温暖化防止活動推進センター長賞

野村 未来さん

滋賀県立水口東中学校2年
少し隙間が空いてる描写は「いつも自分事として気にしている風景なんだ!」と感じます。

優秀賞



湯浅 友梨香さん

草津市立志津南小学校1年

自身の気持ちの持ち様や人への思いやりが地球全体への思いへと繋がっていくことを伝えています。



草野 奏羽さん

米原市立伊吹小学校4年

生活はますますスピーディーに便利になりますが、「本当の豊かさは何か」という疑問を伝えています。



中川 果乃さん

大津市立逢坂小学校4年

自身の行動に帰ってくることを、巡らせて考える表現になっています。伝えたいことが目に飛び込んできます。



眞田 伊織さん

近江八幡市立安土中学校1年

急に解決できることではないことを伝えています。たくさん貯まった時には、私たちの考え方が変化しているのでは。



高岡 優羽さん

滋賀県立水口東中学校1年

本の中に様々なクールチョイスの場面が描かれるアイデアが面白く、感じて行動を起こす、その人に委ねられているというメッセージが素敵です。



南野 眺慧さん

滋賀県立水口東中学校1年

受け継がれてきた風景を残しながら、自然の恵みと脅威に向き合い、学んでいかなければならないことを伝えています。



李 美祺さん

滋賀県立水口東中学校3年

買い物をする時からクールチョイスが始まっていることを気づかせてくれます。



佐々木 蒼依さん

滋賀県立栗東高等学校3年

柔らかいタッチで、力まないで、今できることを伝えています。

作品講評



成安造形大学
共通教育センター／地域実践領域
石川 亮 准教授

多くのポスター作品の、制作に取り組んだ生徒、児童のみならず、指導に当たった先生方や生活を共にする保護者の方々、支え合い、関係する方々の丁寧な指導と一緒に自身の問題としていこうとする意識のあらわれだと感じています。

自然と人との共生をめざして

その人に 聞く

たんかいりょうり トヴィン
淡海料理 Tovin

店主・料理人 大西 正紀 さん

琵琶湖のヨシを使った「ヨシ紙」を、メニュー表やテーブルマットに使用されているレストラン「淡海料理 Tovin」さん。見せて頂いたメニュー表には、お店のロゴの美しいエンボス加工が施され、滋賀の食材がちりばめられた、おいしそうな料理名が並んでいました。手にやわらかく、目に暖かい、ヨシ紙の良さも存分に引き出されているように感じました。

お料理にもさぞ手をかけておられるのだろう、いつか食べてみたいと思っていましたが、先日、食材以外にも滋賀の名産品が数々並ぶ大西さんのこだわり空間、浜大津の旧大津公会堂内のお店へお伺いしました。

— 「トヴィン」。初めて聞く言葉ですが、店名の由来を教えてください。

大西さん 「料理と、ワイン(vin)」という、私の造語です。日本酒が一斗入る「斗瓶」にもかけています。蔓を巻いた斗瓶を、お店にディスプレイしています。



斗瓶。1升瓶10本分。

— このお店の雰囲気、このヨシ紙。暖かいですね。ヨシ紙をご利用いただき、ありがとうございます。

大西さん はい。滋賀生まれ滋賀育ちなので、なるべく滋賀県産の物をとこだわっています。前のお店時から、自分の名刺などに財団のヨシ紙を使っていました。コロナの影響で今年1月から始めたテイクアウト用お弁当の、包装にも使っています。お客様にも好評です。

— 確か以前は甲賀市でお店をされていたと伺いましたが。

大西さん 水口町の貴生川で、淡海地鶏料理と炭火焼き鳥の店を、地域の皆さんに愛されて20年間やっていました。ここでは「メーカーズディナー」というスタイルで、ワイナリーや酒蔵の方にお越し頂いて、料理とお酒のマリアージュを楽しむという会を月1回程度開催し、大変好評でした。このスタイルでもっと多くの人に日々感動を提供したいという思いが強くなり、昨年7月にこちらへ移転しました。

— 滋賀の食材でこだわりの料理を多くの人にとのことですが、いきなりコロナの直撃を受けて大変ですね。

大西さん そうなんです。厳しい状況だったのですが、ここ浜大津に、滋賀にこだわった店があれば面白いと思い、開店しました。京都にも近く、県外や海外の方にも滋賀の美味しい料理を味わっていただきたいとの思いからです。

『かしの川中』さんの淡海地鶏をメイン食材に、琵琶湖の湖魚、県内各地の産直野菜をコース料理で提供しています。飲み物も県内の日本酒の酒蔵に限定、県内産のワインはすべて取り揃えています。ソフトドリンクも石山の岩清水に、高島のアドベリーサイダー等々を揃え、料理に合う物をおすすめしています。

— ここだけで滋賀の味覚を味わえそうです。

大西さん では、こちらをどうぞ。これは、ランチのコース中盤でお出ししている、「TORIあわせ」という一皿です。今日は、淡海地鶏のカステラ玉子焼き、氷魚の釜揚げ、地鶏白肝のうま煮、九重味噌さんの赤みそ仕込みの鴨ロース、フォアグラの白みそ漬け、近江鴨の自家製生ハム、赤こんにゃくの煮物、赤大根、Tovinのえび豆、ピワコドーターズさんのふなずし、馬杉湖魚店さんのウナギ佃煮、古株牧場さんのブルーチーズ、干し柿とツヤコフロマージュ、を盛り込んでいます。



Tovin店主 大西さん



「TORIあわせ」



「虹鱈のマリネ
-県内産文旦と山野草と一緒に」

— 県内を駆け回って集めた食材に、さらに手間ひまをかけられた逸品が、一皿に凝縮されていますね！

大西さん 主に、湖魚は漁協、野菜は直売所で仕入れていきます。普段はフランスの鴨を使っていますが、最近は高島産の近江鴨を使うことも増えてきました。フレッシュな状態で手に入るの、生ハム仕立てにしたりしています。この器も信楽焼なんですよ。

— 県民の皆さんはもちろんですが、県外や海外の人たちに、滋賀の、琵琶湖の食の魅力を発信できたらいいですね。

大西さん そうですね。例えば東京日本橋のアンテナショップなど、期間限定でも挑戦してみたいですね。

— 滋賀の食文化が深まり、広がりますね。ぜひこれからできることを一緒に探しましょう！

日本 ヨシ紀行

ヨシの風景を訪ねて

第7回 こじまこ 児島湖

(岡山市南区、玉野市八浜町)



倉敷川河口付近のヨシ原

岡山平野の南部にある児島湖付近に、昔、「吉備の穴海」と呼ばれる美しい海がありました。そしてここに流入する旭川、吉井川、高梁川などによって運ばれた土砂がたまって干潟が発達し、干拓の適地となりました。そうして安土桃山時代から戦後にわたる干拓が行われてきました。

児島湖の植物は、ヨシ、ヒメガマ、マコモ、ヒシなどが生育しています。貝類は、ドブガイ、マツカサガイ、サカマキガイなど。鳥類としては、カルガモ、マガモ、アオサギ、オオバンなど。魚類としては、フナ類、ボラ、ウナギなどが生息していて、タナゴ類も豊富です。

ヨシはというと、丈は、約1.9mという調査記録があり、



取材時にも、2.0m前後のものが多かったです。全体的には丈の低く細いヨシが多い印象がありました。

ヨシ刈りは、毎年岡山県の事業として行われていて、令和元年度には約3haの刈取が行われました。過去には植栽も行われたこともあります。

また、高校生によるヨシ刈り体験も行われています。刈取られたヨシは、ほとんどチップ状にして、果樹園などのマルチ(草押さえ)材として利用されています。その他若干ヨシ紙葉書と切り花栽培の補助材として利用されています。



高校生によるヨシ刈り



果樹へのマルチ

協力・写真提供：岡山県

滋賀県 地球温暖化防止 活動推進員 リレートーク



白石 進さん
大津市在住

今回は、第1期から継続して滋賀県の地球温暖化防止活動推進員(最年長の89歳!)として活動に尽力され、また先頃、長らくの近畿農政局での功勞に対して瑞宝双光章を叙勲されたこの方です!

琵琶湖の富栄養化による汚染や環境問題で、県が募集した「環境自治推進員」に平成10年に応募しました。ゴミの処理、生活排水、廃油、さらに住民の意識高揚等、多くのことが提起され、活動に参加しました。続いて、地球温暖化防止活動推進員になり、現在23年目となります。小学校への出前講座や幼稚園での人形劇等多数参加し、色々と学びました。また、地元自治会へも働きかけ、温暖化防止センターの応援で脱炭素の出前講座も実施しました。これらすべて人との“繋がり”であると思っています。

最近、お店で買い物をした人が、レジで支払後、買った物を持参した容器に入れ替え、その場でプラ容器をごみ箱に捨てる風景が見られます。これらの容器を紙に替えられないか、そんな身近なことも温暖化対策につなげて考えています。



子どもに小水力発電のしくみを説明する白石さん

滋賀県地球温暖化防止活動推進員は、地球温暖化対策の推進に関する法律に基づき、滋賀県知事より委嘱され、普及啓発活動を推進されています。

シンポジウム ヨシの未来を考える ～女性の視点からみた「魅力」と「可能性」～

新型コロナの影響もあり、皆さまに会場いただけるかどうか心配していましたが、満員御礼！

ヨシを生業とされている方、保全活動に携わられている方、ヨシの新たな魅力を引き出す商品づくりに携わられている方など、会場の皆様が全て「講師」「登壇者」とも言うべきお顔触れの中、和やかな中にも熱気あふれる会となりました。



ご挨拶

「人と自然の共生」を具体的に目指すべく、滋賀県が全国に先駆けて定めた「ヨシ群落保全条例」。淡水環境保全財団はその制定の翌年、平成5年に設立され、ヨシ原の保全に深く関わってきました。

特に、本年度までの3年間は、全国各地のヨシ原を訪ねて調査・取材を重ね、素晴らしい方たちとの出会いをいただきました。

このたび、その集大成として、このシンポジウムを開催いたしました。



財団理事長 中鹿



基調講演

作家・編集者 森 まゆみ 様

「自然と人が協力して作り上げた景観
～ヨシ原と茅葺屋根を巡って～」

上野・不忍池をめぐる人との関わりの変遷や琵琶湖とのご縁、ヨシをはじめとする植物の日本・世界各地での利用の違いや工夫の様子、東日本大震災以降の東北でのヨシ産業復興の様子など、幅広くお話ししました。

講演概要

コロナで、お引き受けしていた講演などが次々にキャンセルになり、今日は昨年1月以来の、ずいぶん久しぶりの講演となりました。まちづくりや地域活性化などへの思いも強く、進めていきたいのですが、やはりオンライン会議では難しく、直接話を聞いたり話したりということが可能であることが、本当に幸せなことだと痛感します。

私は、仲間たちと40年前から「地域の記憶を記録に変える」を合言葉に、地域雑誌『谷根千(谷中・根津・千駄木)』の発行など、いろいろなことに取り組んで来ました。

不忍池と滋賀の関わり

都心の貴重な水辺空間「不忍池」は、徳川三代が帰依した天台僧正が、琵琶湖に見立て、比叡山をイメージして高台に「東叡山寛永寺」を建立した。竹生島も作り、弁天様も移した。

ヨシについて

平安時代までは「アシ」という言葉を使っていたが、「悪し」につながることから「ヨシ」と呼ばれるようになった。古事記にある日本国の美称「豊葦原瑞穂国」とは、アシが生えているところで米がとれるという意味。

アシが屋根に乗ると、「カヤ」と呼ばれる。ヨシは、太古の昔から世界中でいろいろなことに使われている。ヨシ紙、笛、箆置き、屋根にのせる、など。根っこは漢方薬に使われる。雑草の発生をおさえ、肥料になる。

今日特にお話したい、東北について

東北はとてめかやぶきの建物が多かった。建物の保存を思い、各地の建物を見て歩く中で、かやぶき屋根の風景が大好き。震災復興のお手伝いをする中で、多くの伝統的建造物が失われたことを残念に思う。日本ナショナルトラストの「ふるさとのタネプロジェクト」でも支援している。

「ヨシを刈る風景」。一部手刈りでやっているが、今は輸入した機材で機械刈りをされている(写真左)。

熊谷産業という会社(写真右・社屋壁もヨシ!)が、文化財の屋根をふく事業をされている。熊谷さんはもともとは農家。ヨシに特化して企業にし、現在は全国の文化財の屋根を葺いている。

ヨシと人間の深い長い結びつきをこれからも考えていきたい。



その他、東北や国内外に残る、地域の植物を屋根材などに使った、その地域らしい建物風景を、たくさんの写真とともにご紹介いただきました。アンケートでは「もっとお話を聞きたかった!」との声をたくさんいただきました。

パネルディスカッション

座談会「自分の仕事」×「ヨシ」×「未来」＝？

業種も立場も異なる4名の女性に、ご自身のお仕事での「ヨシ」との関わりについてお話をいただき、これからどんなことをしてみたいかについて語って頂きました。



滋賀県立琵琶湖博物館
主任学芸員
芦谷 美奈子 様

水生植物生態学の専門家として、水草の一種としてヨシに関わる中で、琵琶湖博物館展示リニューアルで「ヨシ原」の展示を作成。そのプロセスでヨシに関わる人々の思いを知り、ヨシの面白さに目覚め、ヨシの使われ方に興味を持たれていることを発表。

- 「滋賀県に来て思うのは、近くに琵琶湖があるのに、無頓着な人も多いということ。もっとヨシをはじめとする水草を手にとってもらう、身近に感じてもらえる仕組みを作りたい」
- 「琵琶湖博物館でのヨシの展示では、質が良い分、値段が高いということをお伝えしても『欲しい』という声を聴くことが多い。『いいな』と思った人がすぐにも買える場所、機会を作れたらオススメもしやすいし、手にとってもらいやすいと思う」

新潟で障子や襖、格子戸、簀戸を作る建具店で、ホームページや印刷物等の制作に携わる。滋賀のヨシの奥深さ、そのヨシを使った簀戸の、年月を経て変わる色の美しさに驚かれたことを感性豊かに発表。製品を愛し真摯に向き合う様が来場者の心を打った。

- 「ヨシの簾戸は、都心の新築マンションの方に人気がある。自然の少ない都会だからこそ、季節や風景を感じさせてくれる簾戸が愛されるのかもしれない」
- 「本当に良いヨシは、本当に美しい。そんなヨシがどのようにして生まれ、どのようにして見つかったのか。そういったヨシに関わる人たちの話を聞いていきたい」
- 「地元の福島潟のヨシを使った簀戸を作るのが夢」



有限会社高橋建具製作所
五十嵐 郁子 様



株式会社たねや
社会部 部長
小玉 恵 様

「今日から社会のために生きてくれ」との社命により、社会部部长に就任。「農」と「地域のつながり」を大切に、創業の地、近江八幡市の美しい自然の中で企業活動を継続していけることに感謝し、地元の信頼を得て行う「たねや」のさまざまな活動を発表。

- 「ラ・コリーナは『未来を語る場所』。お客様に発信したり、皆と一緒に考えながら『今はないもの』をヨシを素材に作っていきたい」
- 「西の湖の清掃活動に参加しているとゴミの多さに驚かされる。地元の方のネットワークにいれていただく『汚れているのも人、守っているのも人』と、えもいわれぬ使命感に駆られる。美しいことだけでなく、私たちがやっちゃっていることも含めて伝えていく責任があると思う」

滋賀銀行では長年「ヨシ刈りボランティア」の他、苗植え、刈り取ったヨシを行員の名刺に採用するなど、水質保全・生態系保全に貢献する「環境経営」に取組まれ、環境意識の高い人材の育成にも注力していることを発表。

- 「ヨシのストーリーを伝えながら、新しい発想・視点も含めて活用の方法を考えていくのが大切だと思う」
- 「ヨシの製品は、品質は良いものの、大きなものは値段も上がってしまう。生活の中や身近にある、小さくかつ目に留まるものをヨシに置き換えていくことができれば、より広がりが見られると思う」



株式会社滋賀銀行
サステナブル戦略室
大西 佳央梨 様

等など、話は尽きず…。
基調講演者の森様にもコメントをいただき、あっという間に閉会のお時間となりました。

会場からの質疑応答を控えさせていただく代わりに、アンケートでお気持ちを聞かせていただけたらとお願いしたのですが、どの用紙も文字がびっしり。

シンポジウムの感想や、ご自身の活動への思い、ヨシの新たな利用に向けた取り組みの様子や、活動の提案など、本当にたくさんの思いを寄せていただきました。

ご来場いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

文字がびっしりの
アンケート回答用紙



高島浄化センターの汚泥処理にコンポスト(堆肥)化を県内初導入！

高島浄化センターは、高島市内(高島処理区)の汚水を集め、きれいに琵琶湖に放流している下水処理場です。汚水を処理する過程で発生する下水汚泥の処理方法として、高島浄化センターの場内にコンポスト化施設を設け、下水汚泥のコンポスト化を行うため標記の事業を実施することとしました。財団はこの事業を全面的に支援して参ります。

コンポスト化事業とは…

下水汚泥を微生物により分解する好気性発酵によりコンポスト(肥料)を作ります。製造したコンポストを地域で利用する地産地消による資源循環の構築を目指します。



「滋賀SDGs×ビジネス表彰」奨励賞を受賞

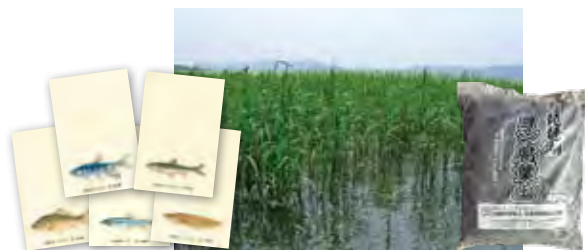
「将来の滋賀のありたい姿」を目指し、社会的課題の解決に向けた新たなビジネスの創出を支援する「滋賀SDGs×イノベーションハブ」(愛称:しがハブ)。過日、しがハブ主催の「滋賀SDGs×ビジネス表彰」が行われ、財団の「ヨシ原保全のための『循環システム』づくりプロジェクト」が奨励賞に選ばれました。

「美しいヨシ原を守りたい」とヨシ刈りに取り組んでくださるボランティアの皆さんの思いを、どうやって「カタチ」に変え、「新たな価値」に結び付けていくのか。これまで取り組んできたヨシの腐葉土やヨシ紙のみならず、新たな商品の開発や、環境教育プログラムの充実など、ますます積極的に進めて参ります。



ヨシ製品を販売しています

刈り取った琵琶湖のヨシを利用した様々な風合いのヨシ紙製品を多数取り揃えています。また、特にキク作りに適したヨシ腐葉土や、水辺の緑化と景観づくりに優れたヨシ苗の育成販売をしています。



「COOL CHOICE」にご賛同ください

温暖化の進行を防ぐためには、1人ひとりが日常の生活を見直していくことが必要です。COOL CHOICE(=賢い選択)は、地球温暖化防止につながる行動などを賢く選んでいくという運動です。



賛助会員を募集しています

財団の事業活動にご賛同、ご支援をいただける賛助会員を募っています。
【会費】個人会員 1口 1,000円/年
 団体会員 1口 10,000円/年
【会員特典】広報誌「明日の淡海」のご送付、メールマガジンによるイベント情報等ご案内、財団販売のヨシ製品を2割引でご購入(個人会員のみ)
 ※詳しくは財団HPをご覧ください。

公益財団法人 淡海環境保全財団 「明日の淡海」

発行 公益財団法人 淡海環境保全財団

VOL.33 2021年3月発行 (年4回発行)

〒525-0066 滋賀県草津市矢橋町2108番地
 TEL:077-569-5301 FAX:077-569-5304 E-mail:info@ohmi.or.jp

【滋賀県地球温暖化防止活動推進センター】
 TEL:077-569-5301 FAX:077-569-5304 E-mail:ondanka@ohmi.or.jp

【淡海環境プラザ】
 TEL:077-569-5306 FAX:077-569-5334 E-mail:plaza@ohmi.or.jp



編集後記

不安の中、さまざまなことが大きく変わってしまった1年でした。本誌も年4回発行の予定が、今年度は3号に。「グリーンリカバリー」を率先して推進するという役割に積極的に取り組んでいきたいと思っております。



- 用紙:適切に管理された森林の木材を利用したFSC®認証用紙
- インキ:環境配慮型インキ(植物油インキ or ノンVOCインキ)
- 印刷:有害な廃液を排出しない水なし印刷